

(仮称)淑徳大学戦史研究会会報 第2号

山川栄

第三十六警備隊始末記 1

ハーネル

駄作兵器からみる欧州大戦 9

高橋杏

朝鮮戦争の戦況 14

軍曹

軍艦武蔵の建造過程 20

古城干

作戦術についての整理 23

第三十六警備隊始末記

山川栄

海軍軍人であった筆者の曾祖父の何某は、一九四四年八月十五日から十一月一日の転属まで「第三十六警備隊」（以下三十六警と略す）に所属していた。本文ではこの三十六警の足跡を追う。

各資料に記された三十六警の姿

アジ歴格ロツサリ―「第36警備隊」によると「1944年5月5日、ネグロス島の現地部隊で編成」とだけ解説がある。①防衛省防衛研究所において史料を探した際は「日誌未着」とのこと、情報は得られなかった。

そこで、戦後に厚生省引揚援護局業務第二課の作成した「比島方面の海軍戦斗の概要」の記述を拾おう。これに記された三十六警の情報は次の通り。「米軍の上陸当時、レイテに在った海軍兵力は、第三十六警備隊を主とす

る約七〇〇名がタクロバンにあり、「セブに在った第三十三特別根拠地隊に所属していた」とのことだ。その後、「米軍のタクロバン上陸に当っては所在海軍兵力は市街西方の高地で抵抗を試みたが、衆寡敵せず、逐次山中の陸軍防備陣地内に入り第十六師団長の指揮下に入った。進出準備中の第三十六警備隊本部はセブで敵の上陸を知ったので、司令以下は大発に搭乗レイテへと急いだ。本部員の大部はレイテ進出に成功したが、司令は艇内で爆撃を受けて戦死したので、レイテの海軍地上兵力は指揮者を失い結局各個に陸軍の指揮下に入った」そうだ。

レイテ島進出以前はネグロス島、コロドに所在していたようだ。そのことは「コロド部隊」の項に記されている。

コロドは「有力な飛行場と前面のギマラス艦隊泊地を持つ中比の要点で第三十六警備隊が置かれていたが、セブに根拠地隊設置とともに、この警備隊はレイテに進出す

ることになってた。この移駐途上にレイテ上陸が起つたので、戦斗部隊は急速進出した。^③

しかし、レイテ島の戦いの全貌が記された大岡昇平の『レイテ戦記』には三十六警の名は一切登場しない。加えて、レイテ島に「警備隊」の名を冠する海軍部隊は存在せず、誤植の可能性は極めて低い。つまり、三十六警はレイテ島の戦いに参加していない可能性があるのだ。^④

三十六警の回想録

今回の三十六警の調査にあたって、同隊の生還者、主計長の伊東清雄主計大尉の手記等入手した。また、上官の第三十三特別根拠地隊(以下三十三特根と略す)先任参謀兼副長の志柿謙吉大佐もまた回想録を残している。爾後は、これらをもとに三十六警の歴史を構成する。

なお、本文中出典を示していない情報については、基本的には伊東の手記「幻の第三十六警備隊本隊―私のレイテ戦記―」の情報であることを明記しておく。

三十六警の編成

一九四四年五月五日、三十六警はネグロス島周辺の現地部隊と他からの転属者をもって編成された。母体は

に分乗しフィリピンへ出撃した。部隊は敵潜水艦がひそむ危険な海を突破し、ルソン島マニラ、ついで目的地のネグロス島、コロドに到着した。七月中旬、サンベルナルジノ派遣隊及びスリガオ派遣隊が任地へ出発。八月上旬には本部署員がセブに進出している。

なお、七月から八月にかけて、複数名の海軍少尉が第三十六警備隊附被仰付と発令され、三十六警指揮下の各部隊に配属されたとみられる。このうち確認できた者は、七月二日発令、古川文夫、原山悦男、羽鳥敬。^⑤七月十八日発令、藤本一義。^⑥八月五日発令、那須春夫、内藤秀朗、首藤□(一字難読)、水木生、宮井晴美、山口義男、栗田□(二字難読)、池田速男。^⑦このうち水木生は予備学生出身で、セブにあった第百二十七防空隊に所属している。^⑧

セブ大空襲

八月になると、海軍は中部フィリピン防衛強化を目指し、原田寛少将を司令官とする三十三特根の編成を発令した。^⑨三十六警はその指揮下に入るようになった。

二十三日、原田少将、志柿大佐ら司令部幕僚がセブに到着した。司令部の編成にあつたつて、三十六警からの人員抽出が必要になった。そこで志柿大佐は橋大尉を呼び出し、隊の事情を聞きだした。「三十六警は、司令が老

なつた部隊は、ネグロス島、コロドのギマラス派遣隊と、セブ島セブの派遣隊である。新しく編成された三十六警のうちセブ島に本隊約一〇〇名、ビリ島にサンベルナルジノ派遣隊約五〇名、ミンダナオ島にスリガオ派遣隊約五〇名が配備されていた。そのほかにも近辺所在の防空隊等の諸隊を編入したとみられる。

部隊幹部を見ていこう。「海軍辞令公報」によれば、五月五日発令で隊司令に第三南遣艦隊司令部附の渡部威中佐^⑩、主計長兼分隊長に伊東清雄主計大尉、軍医長兼分隊長に嬉野海軍病院副官兼部員の石丸清軍医大尉、隊附に第三南遣艦隊司令部附の福山正夫主計大尉、宇佐海軍航空隊附の原田俊一軍医大尉、ほかに大北正軍医少尉がそれぞれ補されている。^⑪このほか、回想録には先任士官の橋特務大尉が登場するが、辞令公報上では確認できていない。



伊東清雄
七月五日、特設運送艦「讃岐丸」主計長兼分隊長から呉鎮守府附になり、同五日に三十六警主計長兼分隊長になった。六月には讃岐丸を退艦し、呉へ赴いた。呉では海兵団内に本部を置き、転属者の受け入れと兵器、軍需物資の調達を行った。

七月下旬、伊東ら三十六警は重巡洋艦「妙高」「羽黒」

齢であり海軍全般に関して疎く、性格も温厚で隊内はまとまりがつかず、准士官以上は分裂し、終始なにかにつけて対立し、反目し合っているという状況であった。それを受け志柿大佐は人選の大綱を示し、案を出すよう指示した。^⑫その後も司令部位置の選定などで橋大尉らは協力させられた。

九月十二日、セブは空襲を受ける。三十三特根機関参謀の林正少佐は空襲が始まると三十六警に飛び込んだ。林は空襲のさなか司令部に戻り、その時のことを志柿大佐に説明したそうだ。

橋大尉は、玄関のところで、「空襲、空襲」と怒鳴っていた。兵隊たちは、すぐに退避壕に入った。敵機が上空に来て、爆撃をはじめたので、機関参謀は、玄関を入り、左に折れた廊下にあった。橋大尉は、玄関を入ったところにいた。

そのときであった。爆弾は、玄関の前五メートルに落ちた。猛烈な爆風は、玄関から裏に突き抜けた。橋大尉は爆風に吹き倒されて即死

(中略)

三十六警司令は、空襲というので屋上見張りの付近に行こうと思ひ、バルコニーに出たところ、敵機が突っ込んで来た。もう、どうにもしようがない。「ええい、どうにでもなれ」と、あぐらを

かいて座り込んでしまった。爆弾は、建物の西側、兵員室の真上に命中した。つづいて、機銃掃射を受けた。

しかし幸運にも、微傷だに負わなかった。屋上見張員は、見張所の一隅にいたが、これも、何ともなかった。そして、屋上の軍艦旗が、フツ飛んだので、見張員は、すぐに新しいものを揚げた。軍艦旗は翻翻とひるがえっていた。(15)

この空襲では飛行場と港湾施設が標的となり、とくに飛行機のほとんどが破壊されるなど、相当な被害を受けた。三十六警では橋大尉以下一〇数名が戦死した。また、二十四日にもセブは空襲を受けている。

竹下大佐の着任と本隊のレイテ派遣

九月下旬、三十六警司令の交替があり、竹下宜豊大



竹下宜豊
次上海事変に横須賀鎮守府第一特別陸戦隊司令として参加し、「白襪隊長」として勇名をはせた人物である。(15)

佐が着任した。(15)竹下大

佐は、一九三七年の第一

次上海事変に横須賀鎮守

府第一特別陸戦隊司令と

して参加し、「白襪隊長」

として勇名をはせた人物

である。(15)

乗る機帆船に命中した。竹下大佐、石丸軍医大尉ほか本部幹部は戦死。他の舟艇もすべて撃沈、撃破され、生き残った者は付近の小島に泳ぎ着き、約半月後セブに帰着した。(15)

ここに、三十六警は壊滅したのであった。

先発隊のゆくえ

本隊が壊滅した一方で、伊東ら先発隊は無事にタクロバンに到着した。港では、タクロバン連綴基地隊(長 寺田徳藏兵曹長)の支援を受けながら、揚陸作業を行った。十月十六日、伊東は三十三特根タクロバン派遣隊長の竹谷秀治大尉(15)に挨拶に向かった。

十八日、レイテ島沖に敵の大船団を認めた。日本軍はこれを敵の本格的上陸と判断した。竹谷大尉は、付近に所在する海軍部隊約一〇〇〇名を基幹とする陸戦隊(以下竹谷部隊と記す)の編成に取りかかった。(15)伊東は指揮班に属し連絡を担当、伊東の部下たちは連綴基地隊に編入された。竹谷部隊はレイテ島所在の陸軍第十六師団歩兵第三十三連隊長の区処を受けることになり、その任務はタクロバン根拠地の確保であった。

十九日、艦砲射撃が始まり、伊東らは暗号書の焼却にあたった。二十日、レイテ島に米軍が上陸する。竹谷部隊は既に爆撃や砲撃で少なからぬ死傷者を出していた。

伊東は竹下大佐に三十六警の現状を説明すると、竹下大佐は戦力の少なさに一言「ウーン」と漏らしたという。

敵がレイテ島に迫ると、三十三特根に上官の南西方面艦隊第三南遣艦隊司令長官から、竹下大佐をレイテ島のタクロバンに進出させるよう命令があった。この命令では、竹下大佐にタクロバン所在の海軍部隊の統括指揮を担当させるほか、三十六警本隊の進出についても指示された。この命令に対し、三十六警のうちセブにいる隊は残留し、パゴドにいる本隊が進出することとなった。竹下大佐は本隊と合流するため、パゴドへ向かい、伊東はタクロバンで本隊受け入れの準備を行うため先発することとした。(15)

十月十五日、伊東は部下一〇名とともに暗号書、タクロバン湾に敷設するための機雷、その他当面の軍需品、糧食を徴発漁船の機帆船に積み込み、出発した。

竹下大佐率いる三十六警本隊約八〇名は、十月十四日に志柿大佐から「進出の好機と思惟す」の電報を受け取り、その日の夜、機帆船や大発に分乗しパゴドを出発した。十五日夜、荒天の中、大発一隻が行方不明になった。十六日朝まで搜索したものの発見できなかった。そして、正午近く、レイテ島北岸のヒリラン島沖で、ついに敵機の来襲を受ける。隊は七・七ミリ機銃一丁をもつて迎撃にあたったが、敵機から投下された爆弾は竹下大佐の

その上軽装備であり、このまま戦闘を行えば損害を増すと判断し、夜陰に乗じて逐次西方の山へ撤収した。そして、第十六師団の命令によりオルモックへ後退する。しかし、十二月七日にはオルモックにも米軍が上陸する。この戦闘で竹谷部隊は約二〇〇名の損害を出し、山中へ退避した。伊東は、増援部隊(伊東徳夫少佐率いる海軍陸戦隊)との接触を試みるが失敗する。以後、竹谷部隊は飢えや栄養失調、マラリアに苦しみながら撤退を続け、一九四五年一月下旬には兵力約四〇〇名にまで消耗していた。陸軍からは「自活自戦」を命じられ、食糧探しに明け暮れた。

二月下旬のある日、陸軍第三十五軍司令部に連絡に向かった伊東は、陸軍参謀より、司令部のセブ転進に海軍の士官、兵各一名の同行を許すと告げられた。そのことを竹谷大尉に伝えると、竹谷大尉は伊東に「三十六警本隊は進出してこないし、貴官は緒戦以来行動を共にして戦闘経過を知っているから、貴官がセブへ行って特根に報告してほしい。」(15)「敵魚雷艇の哨戒網をくぐってセブ島に赴くのは決死行。さりとて増援補給を絶たれたレイテ島に残るのも必死の運命。伊東主計長の武運を祈るよ。」と伝えた。伊東は「無事にセブへ着いたら三十三特根にお願ひして、武器、弾薬、食糧、被服、医薬品を調達して再びレイテ島に帰って来ます」と言ったそう。しかしながら、生き残っていた部下六名の中からの同

行の兵一名の選出には苦悩した。最終的に伊東は同行の兵に古川利一主計兵長を指名した。

三月十八日夜、伊東の乗る大発はレイテ島を出発し、十九日朝、セブ島北部のタボゴンに到着した。二十日、発熱のため同行できない古川主計兵長を陸軍部隊に託し、伊東はセブ市に向かった。三十三特根司令部に出頭した伊東は竹谷部隊の戦闘経過を報告した。また、伊東が三十六警本隊の壊滅を知ったのもこのときであった。伊東は三十六警セブ残留隊とともに三十三特根に吸収され、セブ島の戦いに参加することとなった。

三十六警にまつわる矛盾点

「比島方面の海軍戦闘の概要」では、三十六警はレイテ島にたどり着いたことになっている。これは、三十六警をレイテ島に進出させる艦隊司令部の命令のみが残り、三十六警本隊の壊滅については、その情報が中央まで届かなかったためであると筆者は推測した。また、『レイテ戦記』に三十六警が登場しない点については、大岡が事実を正しく理解していたためではないだろうか。

三十六警の意義

三十六警は、これを一つの部隊としてみると、戦局には

何も関与することなく壊滅したために、戦略的な意義は皆無であるといえるだろう。しかしながら、各地域への警備兵力の派遣や三十三特根司令部の使役への人員の供給源として、「縁の下の力持ち」ともいっべき活躍をしていた。この点から、三十六警の存在価値を見出すことができるだろう。

おわりに

本文では、日本海軍の部隊である第三十六警備隊について述べた。

最終的には、レイテ島の戦いに参加することなく壊滅した部隊であったが、それまでに「警備」戦力としての活躍は出来ていたと考察した。

しかしながら、本文の執筆にあたって、三十六警の活動を直接的に記した一次史料の収集が叶わなかった。そのため、隊員らの回想録に頼ったものとなり、正確性に欠ける文章であるといえる。

このことを解決するには、三十六警史料の搜索のほか、周辺戦域の部隊や三十三特根、艦隊司令部などの上級部隊の資料も搜索することが必要になるだろう。これは今後の課題としたい。

注

- (1) アジ歴クロッサリー「第36警備隊」
<<https://www.jacar.go.jp/glossary/term/0100-0040-0140-0020-0010-0010-0010-0030-0010.html>> (二〇二〇年九月二十九日アクセス)。
- (2) 「比島方面の海軍戦闘の概要」七、レイテ地上戦と増援作戦(第五図)「JACARアジア歴史資料センター」: C14061094000(第1、2画像目)「比島方面の海軍戦闘の概要」(防衛省防衛研究所)。
- (3) 「比島方面の海軍戦闘の概要」十五、中南部比島の海軍部隊の概況(第四、第九図)「JACAR:C14061094800(第4画像目)「比島方面の海軍戦闘の概要」(防衛省防衛研究所)。
- (4) 大岡昇平『レイテ戦記(四)』(中公文庫、二〇一八年)三四六―三四四項(部隊名索引)。
- (5) 渡部威は福島県出身、海兵三十四期、海軍中佐、一九七八年三月一日死去。小野崎誠編『海軍兵学校出身者(生徒)名簿』(作成委員会、一九八七年)八〇項。
- (6) 「5月(4)」JACAR:C13072098100(第3画像目)「昭和19年5月 海軍辞令公報 上」(防衛省防衛研究所)。
- (7) 「7月(一)」JACAR:C13072099900(第4、5画像目)「自昭和19年7月 至昭和19年9月 海軍辞令公報」(防衛省防衛研究所)。

- (8) 「8月(2)」JACAR:C13072100400(第8画像目)「自昭和19年7月 至昭和19年9月 海軍辞令公報」(防衛省防衛研究所)。
- (9) 「8月(4)」JACAR:C13072100600(第1、2画像目)「自昭和19年7月 至昭和19年9月 海軍辞令公報」(防衛省防衛研究所)。
- (10) 水本生『セブ島懐古 終戦前後の思い出』(非売品、一九七〇年)八一―九項。
- (11) 「8月(3)」JACAR:C13072100500(第11画像目)「自昭和19年7月 至昭和19年9月 海軍辞令公報」(防衛省防衛研究所)。
- (12) 志柿謙吉『回想レイテ作戦 海軍参謀のフィリピン戦記』(光人社、一九九六年)二九項。
- (13) 同書、五四項。
- (14) 「9月(3)」JACAR:C13072101000(第23画像目)「自昭和19年7月 至昭和19年9月 海軍辞令公報」(防衛省防衛研究所)。竹下宜豊は高知県出身、海兵四十八期、一九四四年十月十九日戦死、海軍少将。前掲『海軍兵学校出身者(生徒)名簿』二二六項。福川秀樹『日本海軍将官辞典』(芙蓉書房、二〇〇〇年)二二二―二二一頁。
- (15) 「7月」JACAR:C13072072100(第1画像目)「昭和12年 海軍辞令公報 完(部内限)」(防衛省防衛研究所)。

所)。この時の様子は、竹下宜豊、設楽周夫「大和魂の督戦隊」(海軍省記者倶楽部編『上海激戦十日間』揚子江社、一九三九年)に記されている。

(16)志柿、前掲書、八四項。

(17)同書、八五項。

(18)竹谷秀治は鳥取県出身、海兵六十七期、一九四五年五月二十日戦死、海軍少佐。前掲『海軍兵学校出身者(生徒)名簿』二二四項。

(19)当時タクロバンには三十三特根タクロバン派遣隊の他に第九五防空隊(長 水田幸雄特務中尉)、第三百三海軍施設部の一部、台湾巡查隊などの海軍部隊が存在。添田裕吉『第33特別根拠地隊、タクロバン派遣隊』(未刊行、靖国偕行文庫所蔵)。

(20)伊東清雄「幻の第三十六警備隊本隊 ―私のレイテ戦記―」二八項。

(21)伊東清雄「追悼のことば」(未刊行)一項。

(22)同、二二項。

駄作兵器からみる欧州大戦

ハーネル

はじめに

第二次世界大戦における欧州戦線は、一九三九年九月一日、ドイツがポーランドに侵攻したことで始まった。さらにドイツはベルギーやフランスを征服した。しかし、イギリスとの航空戦であるバトルオブブリテンの実質的敗北を境に戦況が逆転。連合国は一九四四年にノルマンディー上陸作戦を実施し反攻作戦を開始した。一九四五年五月九日、ソ連軍によってドイツの首都ベルリンが占領され、欧州戦線は終焉を迎えた。大雑把ではあるが第二次大戦の欧州大戦の概要は以上の通りである。

戦争は科学力を向上させ、新たな兵器を産み出す。この第二次世界大戦がそうであった。科学力向上の結果や成功した兵器の活躍は後世に語り継がれていく。

その一方で、成功の過程には失敗がある。その失敗の様

子からは、当時の人々がどのような技術を求めていたのか、国家の状況がどうであったかが見出せるのではないかと筆者は考えている。

そこで本文では、第二次世界大戦期の駄作兵器から、それを生み出した国の状態を考察していく。

なお、本文では、開発に失敗した兵器や実戦にて役に立たなかった兵器を駄作兵器と位置付けている。

また、珍兵器という呼称について、これは珍妙奇妙な見た目であろうと役立つものもあり、必ずしも駄作とは限らない。実際に役立つ兵器もあった為ここでは珍兵器という呼称は避けることにする。

大戦初期

国家に余裕があるとき、具体的には潤沢な資金を持つ

ていた場合や戦局が優勢な場合、多様な実験開発に手を出しているような傾向が見られる。加えて、この時期は、技術が未発達であり、手探りな点もある。

そのような時期に誕生した駄作兵器として巨大列車砲を挙げる。

ドイツが開発した列車砲「グスタフ」は、口径八十センチ、全長約四十七メートル、重量千三百五十トンの巨大なものである。偵察、観測、警備等を含めた砲の運用に必要な人員は、四一〇〇名以上であり、あらゆる面でハイコストな兵器であった。これだけ大掛かりなこの兵器は、技術的には驚くべきものである。しかし、その労力や経費の割には威力が低く、あまり役に立つ兵器であるとは言えなかった。

グスタフのようなまさに浪漫の塊とも言うべき兵器が出来た背景には、大戦初期におけるドイツ有利の戦局があっただろう。ドイツは電撃戦を用いてポーランドに侵攻し、勢力を拡大していた。この時期のドイツにはある程度の余裕があったことだろう。次いでドイツはフランス侵攻を行っており、ドイツには自国の敗北の不安や経済的不安はなかったものと筆者は考えている。ただドイツ有利の情勢だけがグスタフを生んだ訳では無く、第一次大戦でもこのような列車砲を作っていたことから、ドイツのお国柄の表れであるかもしれない。

作兵器と言える「飛行爆弾やV2ロケットが完成しており、使い勝手が悪く経費もかかるV3は無用の長物であった。

その後、V3は一九四四年七月六日にイギリス空軍(以下RAFとす)により破壊された。この際、RAFが使用した爆弾は「トルボーイ地震爆弾」と呼ばれるものであった。これは地下にある施設やコンクリートに守られたバンカー等を破壊する為の爆弾であった。

トルボーイ地震爆弾は決して駄作兵器ではないが、この二つの兵器の誕生からは、お互いの国が膠着した戦況の打開を狙い、試行錯誤している様子が見てとれるだろう。イギリスは自国の首都の空襲という危機に直面し、反撃の一步を踏み出したい一心であったはずだ。対するドイツ軍は進撃の停滞から不安を抱き始め、焦りが見え始めたと言えるのではないだろうか。

ノルマンディー上陸作戦前後

ドイツによるイギリス占領作戦は失敗し、一九四四年、連合軍はノルマンディー上陸作戦を決行した。

この作戦の陰には、とある駄作兵器の存在がある。それは、イギリスが開発した「パンジャンドラム」である。

パンジャンドラムは、筒状の爆雷に車輪を付け、その車輪にロケットを搭載した兵器で、ねずみ火花のように車

バトルオブブリテン期

一九四〇年、ドイツはフランスの首都パリを占領する。フランス政府や軍はバラバラになりながら亡命し、自由フランスとしてドイツへの抵抗を続けてゆくものや、ドイツの傀儡国家として枢軸側に回るものに分かれた。次いでドイツは、欧州最後の敵となるイギリスの占領を目指した。この際に制空権の確保やイギリスの継戦力を奪うためのイギリス本土空襲、それに抵抗するイギリス空軍との交戦、いわゆる「バトルオブブリテン」が始まる。対するイギリスの首相チャーチルは不屈の精神を唱え、この際の演説が筆者は好き。ホームガードという民兵組織を編成するなどし、ドイツのイギリス本土侵攻に備えた。ドイツはイギリス空軍の抵抗に悩んだ。そして、英独互いに大きな損害を出しながら目的達成を目指し、新たな開発をしていくこととなる。

この時期に生まれた駄作兵器には、長距離高圧砲「V3」がある。

V3はフランス、カレーに設置され、その照準はロンドンに設定されており、計画通りに完成すればこれを砲撃できるという代物であった。

結果的には、V3は開発に失敗した兵器であった。当時の技術では開発は困難だったのである。加えて、すでに傑

輪を回し、直進させて敵の要塞を破壊しようとしたのである。残念ながら、実験ではまともに直進することすら出来ず、操作不能に陥り、砂浜を暴走した。そのため失敗作として開発は中止された。

パンジャンドラムが駄作兵器であることは間違いない。しかし、この計画の実施は重要な役目を果たしていた。連合軍の目標が要塞の破壊であることを示し、連合軍は要塞のある地域に上陸するとドイツ軍に思わせたのだ。そして、ドイツ軍は要塞に兵力を集中させた。しかし、連合軍は別の地域、ノルマンディー地方に上陸、フランス内陸へと侵攻していったのであった。

このような計画を実施したことや、上陸作戦が成功した背景には、連合軍にアメリカが参加し、物資や補給に余裕が生まれていたことがある。一方で同盟国のイギリスなどは、兵器の開発、生産をアメリカに依存しているような状況であった。これは、自国だけではドイツへ対抗しうるだけの兵器が開発出来ない程に国力を失っていたことと表れたと筆者は考える。

地上での反攻が行われる一方で、一九四三年以降、連合軍はドイツへの空襲を行っていた。

一九四三年にドイツへ投下された爆弾の量は二十四万トンとされ、一九四四年には八十万トンと約三倍となっている。

ドイツ空軍は連合軍による空襲の対策として「Ba319

「ナッター」の開発を進めた。

「ナッター」はロケットで上空一万メートルへと上昇、ロケットの燃料が切れた所で滑空を開始し、敵の爆撃機へと接近、機首のロケット弾と機銃を一斉射撃して撃墜を目指すという迎撃機である。ナッターに着陸装置はなく、戦闘後パイロットは機体を離れ、それぞれパラシュートを展開して降下することとなっていた。ナッターは通常の航空機のような複雑な機構を有さず、かつ再利用可能な経済的な機体であった。しかしながら、ナッターは終戦までに完成しなかった。

このような機体が開発された背景には、資源不足の中で空襲の対策を求められ、そのための兵器を低資源かつ早急に実用化する必要があったからだと筆者は考えている。

ドイツの敗北と欧州戦線の終結

一九四五年五月九日、ベルリンをソ連軍が占領し、ドイツは降伏した。これにより欧州戦線は終結を迎えることとなった。

一九四五年に入ると、ドイツは連合軍の侵攻を遅らせることだけで精一杯になってしまっ。

その時期に生まれた駄作兵器には、親子飛行爆弾「ミステル」がある。

このミステルは、制空権を失った空を突破し、爆撃することが困難となった爆撃機を改造し、爆薬を満載した無人機である。

一九四五年三月九日、ミステルは第二百爆撃航空団第二飛行隊により四機運用がされたことが確認されている。この時の任務は、連合軍の進撃を阻止するためのゲルリッツ橋の爆破であり、成功している。しかしながら、このような活躍はわずかで、開発コストに見合うだけの戦果を上げるには至らなかった。

ミステルの発想からは、ドイツが制空権を失っていることを裏付けるとともに、ドイツには連合軍の進撃を阻止する能力を喪失していたことがわかる。また、深刻な資材不足により、まともな兵器の開発や生産をする能力を既に失っていたと考察できる。

おわりに

ここまで駄作兵器を紹介しつつ、欧州戦線の推移を簡素に述べてきた。

国家にあらゆる面で余裕があるとき、あるいは悪化する戦況の中で戦況の逆転や省資源化を狙ったときに駄作兵器は誕生するのである。同じ駄作兵器であっても、国家の状態により、その開発に求められるコンセプトやかけられる予算には決定的な違いがある。また、視点を変

えれば、駄作兵器から国家の状況を推測することもできる。ただし、駄作兵器並びに珍兵器は開発者の執念が関わっている場合もある。この場合は歴史と絡めるのは困難であろうと筆者は思っている。

注

(1) 広田厚司『ドイツの傑作兵器駄作兵器 究極の武器徹底研究』七二項。

参考文献

- ・広田厚司『ドイツの傑作兵器駄作兵器 究極の武器徹底研究』(光人社、二〇〇〇年)
- ・同『続・ドイツの傑作兵器駄作兵器 究極の武器徹底研究』(光人社、二〇〇一年)
- ・同『連合軍の傑作兵器駄作兵器 究極の武器徹底研究』(光人社、二〇〇一年)
- ・桜井英樹『ドイツ版最終決戦兵器 連合軍を圧倒する恐るべき技術力の成果』(光人社、二〇〇二年)
- ・浜由葵夫『奇想天外兵器 ニューエディション版』(新紀元社、二〇〇三年)
- ・株式会社レッカ社『第二次世界大戦の秘密兵器がよくわかる本 超重爆撃機富嶽から、氷山空母ハボクックま

で『PHP 研究所、二〇〇九年』

- ・広田厚司『へんな兵器』(光人社、二〇一〇年)
- ・浜由葵夫『第二次世界大戦 奇想天外兵器』(徳間書店、二〇一一年)
- ・白石光、大久保義信『ナチスドイツの秘密兵器』(笠倉出版社、二〇一四年)
- ・横山雅司『本当にあった！特殊兵器大図鑑』(彩図社、二〇一六年)
- ・世界兵器研究会『本当にあった！世界の珍兵器コレクション』(宝島社、二〇一六年)

朝鮮戦争の戦況

高橋杏

はじめに

筆者は朝鮮戦争に興味があり、映画・回顧録・新書などをを用いて勉強している。映画などはあくまでフィクションであり、史実の研究にふさわしくないという意見も多い。しかし、それらの作られた物語から、朝鮮戦争に対する現代の印象や込められた思いなどを読み取ることが出来る。筆者は思う。そういった意味でもフィクションや物語は歴史研究において重要な資料となり得ると考える。

今回筆者が本稿を記すにあたって参考にした書籍は白善燁『若き將軍の朝鮮戦争』である。この書籍は朝鮮戦争において英雄と呼ばれた韓国軍人、白善燁の回顧録である。

朝鮮戦争は現在でも続いている。冷戦の中でも激しい戦

闘と多くの死者を出した戦争である。しかし、日本では多くの人が朝鮮戦争についてよく知っていないと感じる。そこで本稿では朝鮮戦争の戦況についてまとめる。

朝鮮戦争とは

朝鮮戦争とは、一九五〇年から一九五三年にかけて朝鮮半島全土を戦場として行われた戦争である。戦争は三十八度線付近の武力衝突に始まり、韓国をアメリカを中心とする国連軍、北朝鮮を中国人民義勇軍が支援、板門店での休戦会談で休戦が成立した。

日本では「朝鮮戦争」という名前で知られているが、韓国では「韓国戦争」「韓国動乱」もしくは「開戦日から「六・二五戦争」と呼ばれている。北朝鮮では「祖国解放戦争」と呼ばれ、いずれの場合も「朝鮮」という単語は使われて

いない。韓国では朝鮮戦争以降、北の宣伝に「朝鮮」という言葉を使い、韓国との違いを目に見える形で明確にし、教科書なども「韓国」という言葉で統一した。そのため韓国の人々は「朝鮮」＝「北朝鮮」という印象が強く、「朝鮮」という単語に敏感になっている。そのため韓国では朝鮮という言葉を見る事は少なく、日本で「朝鮮戦争」という名前で広がつている事に関して違和感を持つ人は少なくない。

朝鮮戦争戦況

朝鮮戦争は、一九五〇年六月二十五日の北朝鮮軍による韓国への突然攻撃から、一九五三年七月二十七日の朝鮮休戦協定調印まで行われた。ここでは戦争の流れをまとめる。なお、朝鮮戦争の年表を図1に、主要地名を記した地図を図2に示した。

朝鮮戦争は大きく三つの段階に分ける事が出来る。

①一九五〇年六月二十五日～九月十四日

北朝鮮軍の攻勢により六月二十八日にソウルが占領され、八月には北朝鮮軍最南進。戦線は大邱や釜山の手前まで至った。

②一九五〇年九月十五日～十一月二十五日

国連軍の反攻により九月二十六日にソウル奪回。十一月の段階で国連軍の最北進、戦線は平壤より北に至った。しかし、中国人民義勇軍が参戦、国連軍退却。

③一九五一年六月二十四日

戦況は三十八度線付近で膠着。
最終的には、一九五三年七月二十七日に板門店で朝鮮休戦協定が調印された。しかし、休戦という形であり、七〇年経った現在でも戦争は続いている。

白善燁の「越南」

善燁は北朝鮮出身であり、一九三九年に平壤師範学校を卒業した。

独立後の北朝鮮には共産主義から逃れるために三十八度線を越えて南に至る「越南」を行う人が多かった。また、反対に共産主義に賛成し北へ行く「越北」も存在した。善燁は自由を求め、理想を実現するために仲間の二人とともに一九四五年に越南を決行しソウルへと入った。

韓国に入った善燁は国防警備隊へ入隊。釜山での部隊編成にかかわり、第五連隊に配属された。

当時の三十八度線はそこまで嚴重ではなく、善燁の妻と母もソウルで生活を営んだ。

1950	6.25	北朝鮮軍、韓国に突然攻撃
	6.28	北朝鮮軍、ソウル占領
	8.18	韓国政府、釜山に臨時遷都
	9.15	国連軍、仁川に逆着陸
	9.26	国連軍、ソウルを奪回
	10.20	国連軍、平壤を占領し、鴨緑江に迫る
	10.25	中国軍、人民義勇軍の名目で参戦
	12.5	北朝鮮・中国軍、平壤奪回
1951	1.4	北朝鮮・中国軍、ソウル占領(3月7日占領)
	3.17	国連軍、ソウル再奪回
	4.11	マッカーサー解任
	6.6	戦線が38度線で膠着
	7.7	開城で休戦会談開始(10月板門店で再開)
1953	7.27	板門店で朝鮮休戦協定調印

【出典:山川出版社 第2版 詳説世界史図録】

(図1)



(図2)

一九五〇年六月二十五日、宣戦布告なしに北朝鮮からの奇襲攻撃によって朝鮮戦争は突如始まった。当時、韓国は農繁期という事もあり、大部分の前線部隊は警戒態勢を解除していた。ソウルにおいては二十五日に陸軍庁舎落成式の宴会があり、指揮系統は混乱した。また、当時北朝鮮は当時の最新戦車 T-34SS を保持しており、韓国軍は各所で敗退した。

国連軍の反攻

六月三十日、トルーマンが在日アメリカ軍に出動命令を出し、アメリカ軍が戦争に介入することとなった。九月十五日、仁川において奇襲攻撃の成功により、二十六日にソウルを奪還。その後は十月十九日に平壤が陥落、国連軍は鴨緑江岸まで至った。李承晩は「北進統一」をスローガンに掲げ、国連軍の目標としても、北朝鮮軍の撃退から半島全体の軍事的統一を目指した。

しかし、中国軍の本格的な介入による第二次攻勢、第三次攻勢により国連軍は三十八度線以南まで後退、ソウルを再び占領されるということもあった。以降は三十八度線付近で膠着状態が続いた。

休戦

ソ連の国連安保理事会代表マリクは声明の中で、交戦当事国(韓国と北朝鮮)の会談によって休戦を実現する可能性を示唆した。トルーマン大統領もまた好戦的な国連軍司令官マッカーサーの解任などを行い、和平的な意思を表明していた。

戦争が続く中で交渉は何度も行われ、一九五三年七月二十七日、朝鮮休戦協定が調印された。

朝鮮戦争の死傷者

- ・北朝鮮 軍死傷者 五二万人
民間死傷者 二〇〇万人
- ・中国 軍死傷者 九〇万人
死者・行方不明者 七六万人
- ・韓国 負傷者 二二万人
- ・アメリカ 軍戦死者 三万三六二九人
軍負傷者 十万三二八四人

『山川 詳説世界史図録』より

これらの数値からは、北朝鮮の死傷者数と韓国の死傷者・行方不明者数の数が大きく違う事がわかる。その理由としては様々な理由が考えられる。北朝鮮の民間人の死傷者が多い理由として、国連軍が多くの人を戦争に巻き込んだ可能性を考へることが出来る。また、北朝鮮の軍人の準備が間に合わなかったことも考えられる。また、アメリカ軍の参戦により、戦況が逆転したことをふまればアメリカ軍の攻撃力が圧倒的であったとも思える。

北朝鮮の祖国解放戦争

北朝鮮では祝日として「祖国解放戦争勝利記念日」がある。また、北朝鮮内には祖国解放戦争勝利記念塔や祖国解放戦争勝利祈念館などが設置されている。これは「勝利」という事を大きく国民に印象付けていると考えられる。北朝鮮での朝鮮戦争教育や祖国解放戦争について記された資料や書籍は見つけられていない。

日本への影響

日本政府は日本の参戦を公式には認めてはいない。だが、日本は特別掃海隊を派遣し、事故も起きている。さらに、日本人がアメリカ軍に加わり、戦闘に参加したことなど様々な証言がある。特別掃海隊に関しては北朝鮮やソ連だけでなく、当時の韓国大統領であった李承晩も非難した。特別掃海隊の派遣はアメリカ軍が日本に要請したことであり、韓国軍にとつては予想外の出来事であったと思うが、戦場で戦う韓国軍は日本人を歓迎したという話も残っている。

日本国内では「特需ブーム」と呼ばれる経済的利益を得て、日本の経済発展のきっかけとなった。また、日本の再軍備のきっかけも朝鮮戦争であり、自衛隊発足の基礎

となった。

おわりに

本稿では朝鮮戦争の概要を白善燁『若き將軍の朝鮮戦争』などを参考し記した。筆者自身歴史研究に関してまだまだ未熟であり、あくまで今回は既存の書籍や資料からまとめただけである。また、今回は戦況を中心にまとめたが、この戦争は政治とも深く関わっており、朝鮮戦争はより複雑で難しい戦争と言える。しかしながら、そういった書籍などを読み進める中で、様々な疑問やより深く知りたいことが挙げられた。

・北朝鮮において朝鮮戦争はどのような扱いを受け、どのような教育をされているのか。

・韓国での軍人教育や徴兵制度はどのようなものであったのか。

・朝鮮戦争下の国民の暮らしや娯楽にはどのようなものがあったのか。

・朝鮮半島全土が戦場となったことで多くの難民が発生したと考えられるが、北朝鮮・韓国関係などどのような生活を送ったのか、また、どのような扱いを受けていたのか。

・朝鮮戦争による日本軍の直接的・間接的参戦について。

以上の浮かび上がった疑問を今後の研究を行う中で調べ、自分なりに考察をしていきたいと考える。

参考文献

- ・金裕鴻『韓国が分かる。ハングルは楽しい！』(PHP新書、二〇〇二年)
- ・白善燁『若き將軍の朝鮮戦争』(草思社文庫、二〇一三年)
- ・木村靖二、岸本美緒、小松久男監修『山川 詳説世界史図録 第2版』(山川出版社、二〇一七年)

軍艦武蔵の建造過程

軍曹

はじめに

今回は世界最大最強と言われた大和型戦艦二番艦の武蔵の建造過程について記していく。武蔵は一番艦の大和に比べてあまり目立たない存在であるが、二番艦である武蔵の方がその設備は大和より優れていたのである。その武蔵の建造がどういったものであったのかを紹介していく。

大和型戦艦の設計者と装備

大和型戦艦の建造にあたって設計基本計画の責任者となったのは福田哲二造船大佐。造船部門では竜三郎、牧野茂、松本喜太郎少佐、技師には岡村博、土本卯之助、今井信男が参加した。造機関係では渋谷隆太郎、近藤一郎少将、永井安武技師があたり、造兵関係は菱川万

三郎、甲鉄関係は呉製鋼部の佐々川清が従事することとなった。そして日本の造船の鬼才とも言われた平賀譲海軍技術中將も囑託として参画した。

昭和十二年に入つて第一号艦は大和、第二号艦は武蔵として建造内命が造船関係者に下された。

大和・武蔵の主な要目は次の通り。全長二六三メートル、最大幅三八・九メートル、基準排水量六万四〇〇〇トン、満載排水量七万三〇〇〇トン、航統距離一六ノットで七二〇〇哩、燃料搭載量六四〇〇〇トン、最大速力二七ノット、四六センチ砲三連装三基・九門、一五・五センチ砲三連装四基・一二門、一一・七センチ高角砲連装六基・一二門、二五ミリ機銃三連装八基・二四挺、飛行機射出機・二基、水上機・七機、測距儀一五メートル・四基・一〇メートル・二基、探照灯一五〇センチ・八基、主機関タービン・四基。これが完成時の大和型戦艦の性能

である。

徹底した監視体制の中で行われた大和型戦艦の建造

武蔵を建造する長崎造船所の船台は拡張され、佐世保には大きな修理用ドックが構築された。巨大な四六センチ砲の砲身と砲塔を運搬するために、それだけの目的で一万トンの特務艦も極秘に建造された。武蔵を建造している長崎では船台の周りに巨大なシロ細のカーテンを張りめぐらして周囲から武蔵が見えないようにした。さらに港側にはソ連の公館があり、窓から船台が見えるということでも何も使用する目的がないにもかかわらずその中間に目隠しとして大きな倉庫を建てた。このようでありとあらゆる方法を使って武蔵の存在を隠し続けた。昭和十三年四月、第二号艦・武蔵が一番艦である大和より約五カ月遅れての起工式が三菱長崎造船所で行われた。第二号艦の建造は様々な問題を抱えていたが、造船所職員の努力と工夫によって昭和十五年十一月一日の進水式に至った。式台で進水命名書を朗読した海軍大臣及川古志郎大将によって二号艦はこの日、武蔵と命名された。しかし、海軍はこの艦名を使用することを禁じて、竣工されるまでは依然二号艦の秘匿名で通した。

船台の中に収まっていた時は監視がしやすかったが、進水して艤装岸壁に引き出されると監視が困難となった。

目の前には上海航路の定期客船をはじめ、外航船が毎日のように出入港しており、国内航路の客船や遠洋漁業の出入りも頻繁であるため岸壁の背後の壁をネイビーブルーの塗料で一面塗装して、二号艦の姿を目立たないようにした。さらに二号艦の左舷側の前部と後部二か所に十メートルほどの繫船桁を突き出し、そこに棕桐箆を取り付けて海面まで垂れ下げる対策をとった。こうすることで海上に伸びた遮蔽幕は、繫留位置が斜めであることと相まって、艦の長さや幅の目測を困難にさせた。長崎港には外から出入りする船の他に、湾内を横断する定期便がある。交通船には、常時警戒兵二名が警備のために乗船していた。船室の窓は、ベニヤ板で遮断され、外部の景色が見えないようになっていた。船外に出ても二号艦の方を見ることは禁じられており、乗船者はその方角に顔を向けてはならなかった。当時の長崎に住んでいた一般人からは武蔵が早く出ていつてほしいと嫌われていたと言われている。中には武蔵のことを「バケモン」と呼んでいた人もいたそうである。

おわりに

今回は武蔵の建造過程を簡単ではあるが説明してきた。ここからは、武蔵は大和と同様、厳しい監視体制の中で建造されたということが感じられる。特に外国船や外国

にゆかりのある建物への警戒はさまざま、海外に武蔵の存在を知られるのを徹底して防いでいたのが調査して分かった。さらに憲兵や警察、警戒兵を昼夜問わず巡回させ、進水した後の武蔵をシロで隠すなどしており、ありとあらゆる方法を駆使して人目から避けていた。当時、長崎に住んでいた人からは忌み嫌われ、「バケモン」ことまで呼ばれた武蔵であるが、徹底した監視のおかげで無事竣工できたこともまた事実であるのだ。

参考文献

- ・佐藤和正『動く大要塞徹底研究 戦艦入門』(光人社NF文庫、一九九七年)
- ・手塚正巳『軍艦武蔵 上巻』(太田出版、二〇〇三年)

作戦術についての整理

古城干

はじめに

作戦術とは何か。なぜそれが重要とされるのか。このような疑問点に立って、作戦術について概観し、その意義を以下に記していく。

作戦術の定義

作戦術という言葉は、『デジタル版イミダス2018』において、中村好寿によって、次のように定義されている。

抽象的で、漠然とした戦略指針と具体的・科学的・機械的な戦術行動をつなぐ目的を持って、戦術や作戦(キャンペーン、主要軍事行動)をデザインし、部隊を編成し、運用する指揮官や幕僚の技能

次に、大木毅は以下のように述べている。

作戦術とは、一九世紀以来の模索を経て、ソ連の軍人・軍事思想家たちにより、一九三〇年代に完成された用兵思想である(中略)スヴェチンによれば、それは戦略と戦術の両次元をつなぐものであり、戦術上の成果を積み重ねて、作戦次元の成功に結びつけ、さらに特定戦域での戦略的勝利に持っていくために重要な手段だとしている。

そして、ソ連兵語辞典の定義を引き、次のように説明する。

まず、戦争目的を定め、そのために国家のり

ソースを戦力化するのが「戦略」である。作戦術は、右の目的を達成すべく、戦線各方面に「作戦」、あるいは「戦役」（正確な軍事用語としては、一定の時間的・空間的領域で行われる、戦略ないし作戦目的を達成しようとする軍事行動を意味する）を、相互に連関するように配していく。個々の作戦を実行するに際して、生起する戦闘に勝つための方策が「戦術」である。⁵²

また、田村尚也によれば『戦略次元』における術策は『戦略』『戦術次元』における術策は『戦術』その中間の『作戦次元』における術策は『作戦術』としている。⁵³ 一方で北川敬三は『戦略次元 (Strategic level War)』と『戦術次元 (Tactical level War)』を繋ぐ『作戦次元 (Operational level War)』に適応される軍事行動を律する概念としている。⁵⁴

これらから、作戦術とはソ連により理論付けられたものであり、戦術次元での成功を戦略次元の成功に組織化するための、作戦次元に関わる抽象概念である、ということができるだろう。

しかし、いくつかの留意事項が存在すると筆者は考えている。まず作戦術と作戦次元、作戦との関係についてである。大木によれば作戦術を「作戦自体を遂行するわざ」とすることを誤解とし、「戦略次元の下部、もしくは

戦略次元と作戦次元の重なるところに位置するもの」としている。⁵⁵

作戦という言葉は、例えばアメリカ軍に作戦術などが理論的に導入されるとする一九八〇年代以前にも用いられているように思えるため、作戦≠作戦次元とは限らないと思われる。しかし、作戦と称される軍事行動全般は作戦次元と全くの無縁ではないように筆者には思える。そうなること、作戦術と作戦の関係もなにかしらの関係が想定される。

実際、後に触れるように大木は作戦術が活きた例として「土星」「天王星」「火星」「木星」「海王星」作戦の配置を挙げる。このように作戦という言葉が何らかの形で作戦術や作戦次元に関与していると思われるものの、この作戦術—作戦次元—作戦の関係性について、筆者には明確に論じることが出来ないことをあらかじめ述べておく。

また、中村は作戦術を作戦と共に戦術をデザインすると定義する。また作戦術を「指揮官や幕僚の技能」としている。戦術を組織化するとは述べておらず、技能と言ふより概念、思想と位置づける大木、田村、北川との相違点が見られる。

筆者はソ連軍の史料やロシア語圏の研究は元より、英語圏の研究を全く追えておらず、あくまでいくつかの日本語文献で論じているに過ぎない。そのため、どれが適当であるのか、あるいは筆者が間違えているのか判断がつか

ない。そのため、正しいという意味ではなく、本稿で取り上げることを明確化する目的で、作戦術の性格を定義したいと考える。

筆者は先に述べたように、作戦術を、ソ連軍で明確に理論化された、戦術次元の成果を戦略次元における目的達成に渡すための術についての概念であるとす。またそれは、狭い地理的範囲ではなく、広域における各戦闘の集まりを有機的に組み合わせいくことよって具体化されるものだとする。後に『独ソ戦』から紹介していくつかの場面や、エアランド・バトルについて見ることで、その意義を明らかに示すことが出来るように思う。

作戦術及び連続縦深打撃理論の形成

大木によれば、フランス革命以降の徴兵制度による軍隊の規模、機動の可能性、一會戦の時間の増加という変化が、戦術と戦術の間にある作戦次元というものを想定するきっかけになったという。そしてそれは二〇世紀初頭のロシアにおいて特に発展したとする。⁵⁶

その二十世紀初頭には、日露戦争の敗北があった。田村によれば、決戦会戦による決着の認識や、従来の認識—戦場への部隊の移動を戦略、戦場での部隊運用を戦術とする—の変更が促された。奉天会戦で二個軍の連携がうまくとれなかった経緯から、数個軍の上に「正面

軍（方面軍、戦線）」が置かれるようになった。第一次大戦では、タンネンベルクにおいて北西正面軍は指揮運用能力不足から敗北するものの、ブルシーロフ攻勢において南西正面軍は大きな成果を挙げることになり、作戦術の重要な要素、別個の戦闘の「連携」という考えの端緒となる。その後内戦やソ・ポ戦争における様々な経験、またそれらに関する活発な議論に基づく戦史、軍事理論研究の展開を経て、スヴェーチンは陸軍大学の教授だった一九二〇年代に、作戦術の概念を提唱した。⁵⁷

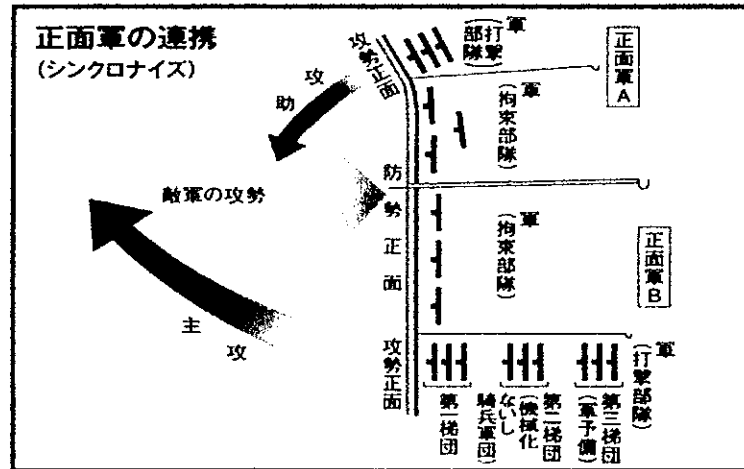
図一は、『赤軍野戦教令』に基づくものである。上図では部隊を打撃部隊（主攻と助攻）と拘束部隊の二つに分け、複数の線を構成する。主攻、助攻と防御を担当する複数の部隊が、異なる正面においてそれぞれ連携して戦闘を行うのである。この時期のドイツ軍、フランス軍の戦術教範では防御はそれ単独の記述であり、広い正面の中に防御を位置づけるような、連関の中で捉えていない。

田村は、このような連携は作戦術の重要な構成要素とすると同時に、一九三六年版『赤軍野戦教令』の先進性であるとする。⁵⁸

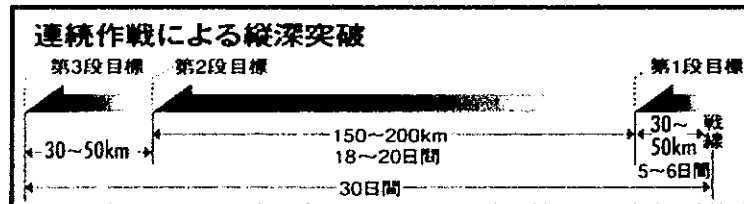
一方、一九三一年に参謀部長に就任したトリアンダフィロフは、強力で長大な陣地を覆滅するためには、砲兵によつて強力に支援される打撃軍による縦深を制圧する攻撃を、連続展開する必要があると主張した（図一下図参照）。それにより敵予備の投入や新陣地構築を

赤軍野外教令の重要な構成要素

1936年版「赤軍野外教令」では、「全線深同時打撃」が基本とされているが、これとは別に「作戦術」を構成する「連携」と「連続作戦」という2つの要素が含まれている。
(原画製作=樋口隆晴)



「連携(シンクロナイズ)」とは、複数の軍が、異なる正面において連携しながら作戦を進めることをいう。図の場合、正面軍AとBの防勢正面と攻勢正面が「異なる正面」であり、それぞれの軍に与えられた目的は「主攻」「助攻」「防勢」となる。



広正面における戦いでは、一回の打撃で敵を撃破することができないため、連続して複数の作戦を行う必要がある。この理論をまとめたものが「連続作戦」理論である。図は、トリアンダフィーロフが提唱していた縦深突破における「連続作戦」を図式化したもの。三段階のレベルで、作戦の目標と距離、日数が定められ、連続した攻撃で敵を突破していくものである。

図一 連携と連続作戦

独ソ戦での作戦術の効果を、主に大木毅「独ソ戦」によって見ていく。

独ソ戦に見る作戦術

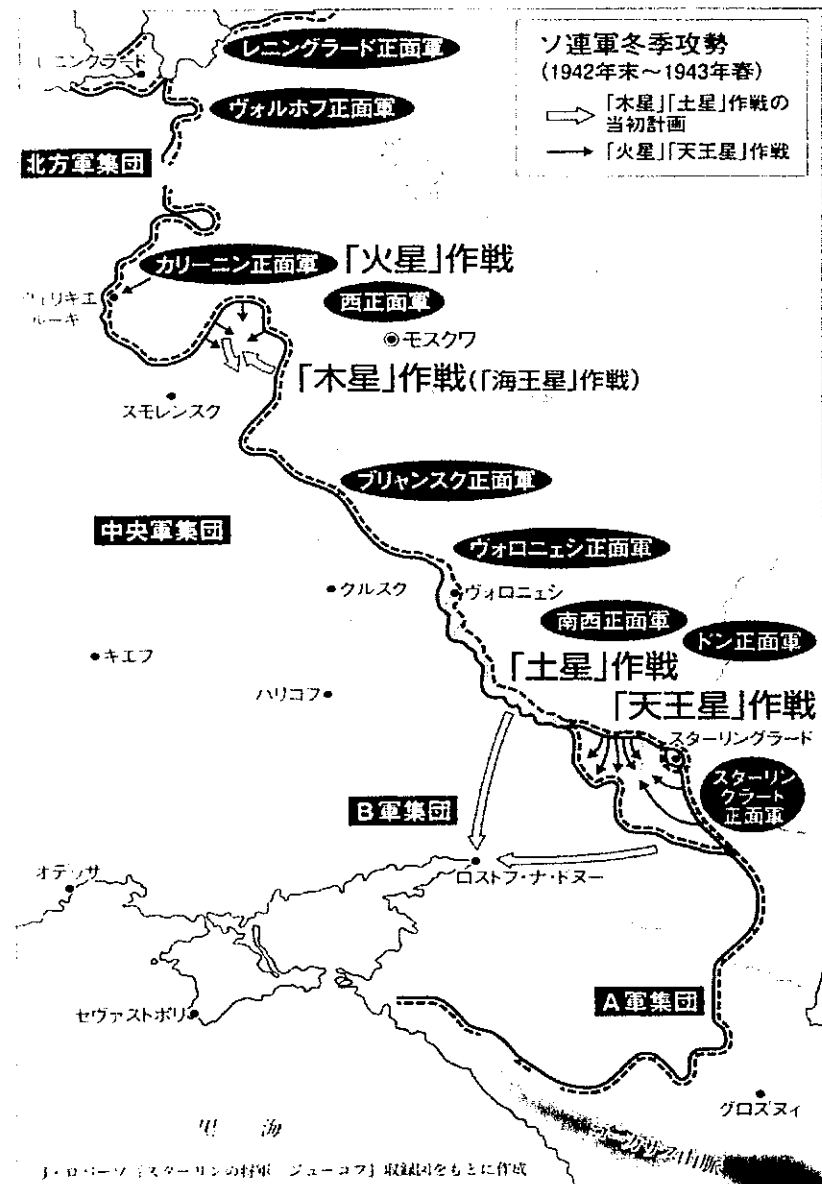
以上が作戦術と縦深戦理論の形成過程の大まかな流れである。大木が「それ(筆者注:作戦術)を作戦次元で実行する際の基盤となる連続縦深打撃理論」(1)として、いる様に、連続縦深打撃理論は、作戦術を実際に行う際に切っても切り離せない関係にあったと考えられる。(12)

防ぎ、戦略目標を達することを目指すとす。トハチエフスキーは一九二三年に「ヴィスワ河畔進攻作戦」上で「連続作戦」理論に影響を与える考えを提示した。一回の戦闘での決着は現代では不可能であるとし、連続して複数の攻撃を実行する必要性を主張したのである。(13)トハチエフスキーはその考えやトリアンダフィーロフの考えなどを受け継ぎ、連続縦深打撃理論を完成させた。これは空軍、砲兵、前線部隊の攻撃により敵陣地全体を制圧する。それより後方は迅速に突破した戦車や機械化部隊、空挺部隊が制圧し戦力再編を阻害する。(14)この後にも連続して打撃を続け、戦争に勝利することを目指すものが連続縦深打撃理論であり、一九三六年「赤軍野戦教令」において言語化・概念化することになる。(15)

一九三七から三八年の粛清では、三万人以上の将校が逮捕、追放された。内二万人以上が処刑されるか行方不明となり、五人の元帥の内トハチエフスキー含む三人が銃殺された。(16)スヴェーチンも三八年に処刑されている。(17)

多くの経験ある将校を失ったソ連軍は、独ソ戦の勃発当初、スターリンが警告を無視し警戒措置を取らせなかったこと、そして「赤軍野戦教令」の内容が、部隊の練度や将校の能力不足などにより逆効果となってしまう結果、大敗を喫することになる。(18)

しかしこの敗北は、追放されるなどした将校の復権をもたらした。参謀次長ヴァシレフスキーは一九四二年夏から秋にかけて、彼らの中から選り抜いた参謀将校の小集団に冬季攻勢計画を作成させた。そして作成されたのが、ドイツB軍集団の第六軍撃滅を目的とする「天王星」、ロストフ・ナドヌーを襲い占領、A・B軍集団後方連絡線を遮断し、南部ロシアの全ドイツ軍撃滅を狙う「土星」、中央軍集団主力第九軍包囲を狙う「火星」、挟撃により中央軍集団壊滅を狙う「木星(海王星)」である。「天王星」の後に「土星」、「火星」の後に「木星(海王星)」を行うことを企図する。これらの作戦は、ただの段階わけではないという。これらはドイツ軍部隊の撃滅、予備兵力の拘束、戦略的要点の確保などが、戦略目標のため相互に連関するように配置されたものであった。(19)



図二 一九四二～四三年のソ連軍冬季攻勢

これらは「火星」での被害による「木星(海王星)」の中止や「土星」ドイツ軍の反撃による「小土星」への縮小などにより、当初の構想を実現できなかったものの、横方向、複数の正面の戦術的勝利を戦略的勝利に結び付けようとする作戦術と、それを達成するために縦方向の連続打撃という連続縦深打撃理論の姿を見ることが出来る。そして、この様な作戦術・縦深戦理論に基づく攻勢は、その後もクルスク会戦後の攻勢や「バグラチオン」作戦などにおいても見る事が出来る。

このようなソ連軍に対し、「バルバロッサ」や「青号」の様な作戦・戦術次元での優位に立ったドイツ軍は、最後まで作戦次元での勝利を続けられれば戦略的勝利を得られると考えるのみであった。²⁰⁾

田村は、ドイツの国土・人口の相対的少なさを、ソ連とフランスに挟まれている地理的状況が短期決戦志向を強めたため、作戦術的な考え方が発展しなかったとする。²¹⁾

大木は「したがって、ソ連軍は、人的・物的資源といったリソース面のみならず、用兵思想という戦争のソフトウェアにおいても、優位に立っていた」と述べている。²²⁾

作戦術の「発見」

北川によれば、ベトナム戦争で勝利できずに撤退した

経験が、米軍において軍事理論や組織の再建への要求を高めさせたとする。²³⁾ そのような状況下、米陸軍教範改定を聞いた国際政治学者、ルトワックが一九八一年に学術誌に発表した「戦争の作戦次元 (The Operational Level of War)」は、作戦次元を理論的に示し、英米におけるソ連作戦術研究の端緒になったという。それは陸軍の目に留まり、作戦次元が一九八二年の陸軍教範『作戦 (FM 100-5 Operations)』に、作戦術が一九八六年の改定で取り入れられることになった。北川は、西側の軍事組織が作戦術という言葉を持ったことは、軍事理論のブレイクスルーであったと位置づける。²⁴⁾

このような流れの中、ベトナム戦争において戦術次元の勝利の積み重ねが戦略次元の勝利に結びつかなかったことと、欧州における大規模部隊による戦闘の想定、技術的進歩の取り入れの要求、防衛中心かつ戦術次元に限定された「アクティブ・ディフェンス」批判、核兵器使用前に通常戦力で早期に決着をつける必要性などの諸要因が、作戦術の重要性を高め、「エアランド・バトル」の形成へと繋がっていた。これは陸上兵力、航空兵力を統合し、同時攻勢作戦を戦場の幅・縦深において実施し敵を撃破することを目指すものである。²⁵⁾

アクティブ・ディフェンスとエアランド・バトル

田村によると、アクティブ・ディフェンスは、米軍において一九七六年に導入された考えで、主攻正面に翼側から抽出した機動戦力(機甲部隊、空中機動の対戦車チーム等)を集中させ、数的優位を確保し反撃するものであったという。しかし主攻正面を特定する時間や、敵の縦深攻撃により機動が阻害される可能性、継続的に投入される後続部隊との消耗戦に最終的に敗北する懸念から、田村はワルシャワ条約機構軍の侵攻を阻止するには不十分であるとした。²⁶ また先に挙げたように、アクティブ・ディフェンスでは核攻撃を避けるための早期の決着が望めない可能性も指摘できると思われる。

このアクティブ・ディフェンスに変わって導入されたエアランド・バトルにおいて新たに取入れられたものの一つは、「ディープ・アタック(縦深攻撃)」である。前線付近に限定された戦闘領域は敵後方深くへと拡大された。前線の部隊と航空部隊、砲兵部隊が第一梯隊、第二梯隊を同時攻撃する。これにより機構軍の攻撃の圧力が低下する時間を作り出し、その期に乗じて逆襲を行うことを意図するものである。

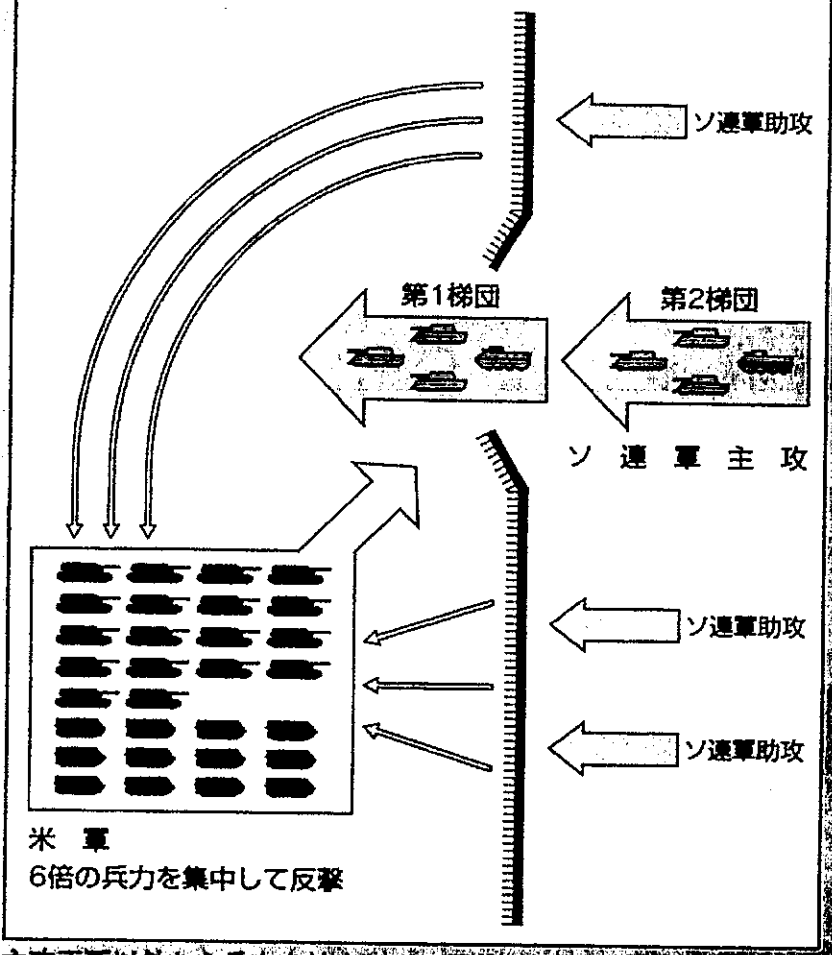
もう一つが「マネーバー・ウォーフフェア(運動戦II機動戦)」という、機動力の高い部隊による打撃、機動打撃を

行うことを重視したものである。例えば、機構軍のOMG(作戦機動群。第一梯隊による突破口から敵後方へ進出して、後続部隊の進路を確保したり核投射能力を無力化したりする)を機動力のある部隊を連携させ攻撃し撃破する様な概念である。

上記の様な考え方のもと、エアランド・バトルは遂行されるとする。図四の第一段階では諸部隊による全縦深攻撃を実施し敵戦力を減らしつつ(ディープ・アタック)、機動部隊が遅滞戦闘によって我の望む位置に敵を誘引する。その間、打撃を行うための他の部隊の機動が行われる。第二段階では第一梯隊戦力低下と第二梯隊加入の間の、敵圧力が減少した機会に、あらかじめ機動していた部隊が攻撃を行い、敵を撃滅する(マネーバー・ウォーフフェア)。この間にも航空機、砲兵による全縦深に渡る攻撃が行われ、敵予備隊には空中機動部隊が対応するのが分かる。²⁷

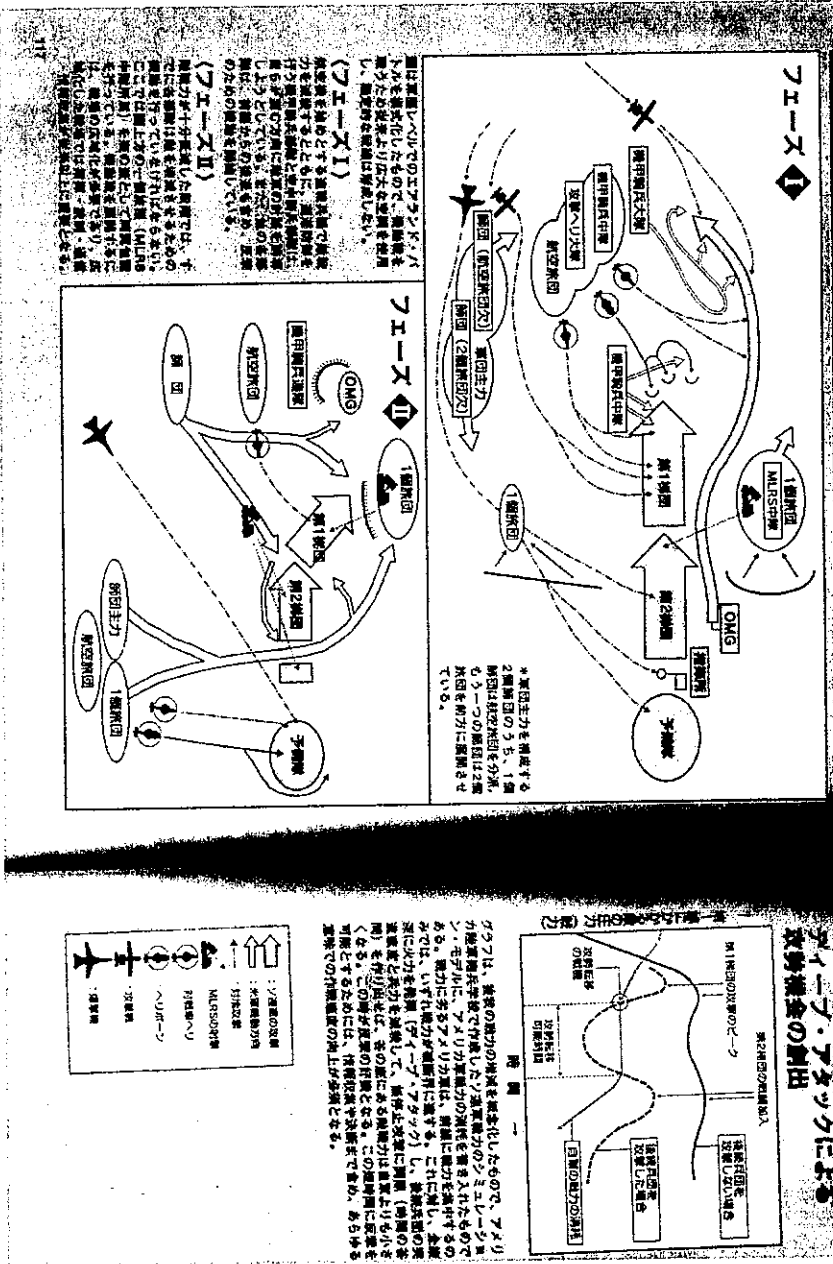
エアランド・バトルにはまず、作戦術の影響を見ることが出来る。広大な幅を持つ、複数の正面での戦術的勝利を、機構軍撃破という戦略目標へと結び付けようとしているのが、先の説明から理解できると思われる。更に作戦術と深く関連した、連続縦深打撃理論の影響も見られる。ディープ・アタックという言葉からもその影響は見て取れるように、前線に限られた戦闘領域は拡大し、あらゆる部隊が全縦深に渡り攻撃を加え、目標を達成しようと

アクティブ・ディフェンス



主攻正面以外から兵力を抽出して、反撃に反し「アクティブ・ディフェンス」であったが、ソ連軍の第2梯団以降の攻撃は防げない可能性があった。

図三 アクティブ・ディフェンス



図四 エアランド・バトル

していることが分かる。

その後、エアランド・バトルはワルシャワ条約機構相手にはついに実戦の機会はなかったものの、湾岸戦争でその威力を発揮したという。(註)

終わりに

(一)まで作戦術の定義からその形成と実戦、八十年代における「発見」からエアランド・バトルまでを概観してきた。最後に所感を述べることで終わりとする。

まず、作戦術が導入された背景には常に危機が認識されていたことが共通する。日露戦争や第一次大戦、ソ・ポ戦争での経験がソ連軍の、ベトナム戦争の敗北からきた危機感が米軍の、勝利のための研究意欲へと繋がりが、実際に独ソ戦や湾岸戦争の勝利を得たように思える。このことは、それまでの考えに固執することなく新たな考えを導入することの重要性を示す、一つの例であるように思える。

また、抽象概念が実際の現実において重要な役割を果たしうる事を示す好例である様に見える。抽象的な概念はともすれば机上の空論になるものである。しかし、それを適切に研究し取り扱えば、ハード面での革新に勝るとも劣らない効果を期待できるものであると筆者は考える。

グレイブ・アタックによる攻勢機軸の創出



注

- (1) 大木毅『独ソ戦』(岩波新書、二〇一九年)一四九―一五一項。
- (2) 同書、一五三項。
- (3) 田村尚也「用兵思想史上の大革新「作戦術」の誕生なぜロシアソ連で発展したのか」『歴史群像』第二十五巻第五号(二〇一六年十月号)、学研プラス、二〇一六年)六八項。
- (4) 北川敬三「軍事組織における問題解決の方法論に関する研究 ―高等教育、ドクトリン、作戦術―」(慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科博士論文、二〇一八年)一四五項。
- (5) 大木、前掲書、一五三―一五四項。
- (6) 同書、一四九―一五〇項。
- (7) 田村、前掲書、七一―七八項。
- (8) 同書、七九―八〇項。
- (9) 同書、七九項。
- (10) 大木、前掲書、一五一項。
- (11) 田村、前掲書、七七項。
- (12) 大木、前掲書、一五一―一五三項。
- (13) 同書、一五三項。
- (14) 同書、五項。
- (15) 田村、前掲書、六六項。
- (16) 大木、前掲書、三八―四一項。

- (17) 同書、一五四―一五七項。
- (18) 同書、一五五―一五七項。
- (19) 同書、一五九―一六〇項。
- (20) 同書、一五七項。
- (21) 田村、前掲書、八〇項。
- (22) 大木、前掲書、一五七―一五八項。
- (23) 北川、前掲書、一四五項。
- (24) 同書、一五〇―一五一項。
- (25) 同書、一五一―一五三項。
- (26) 田村尚也「エアランド・バトル 冷戦下に生み出された新・機動戦理論」『歴史群像アーカイブ Vol.3 ミリタリー基礎講座Ⅱ現代戦術への道』、学習研究社、二〇〇八年)一一二―一四項。
- (27) 同書、一一四―一七項。
- (28) 北川、前掲書、一五三項。

図出典

- 一 田村尚也「用兵思想史上の大革新「作戦術」の誕生 なぜロシアソ連で発展したのか」、七九項。
- 二 大木毅『独ソ戦』、一五六項。
- 三 田村尚也「エアランド・バトル 冷戦下に生み出された新・機動戦理論」、一一四項。
- 四 同書、一一六―一七項。

編集後記

この度はコレをお読みいただきありがとうございます。
 あく今回も何とか編集を終わらせることが出来た。期限内に合いそうです。今現在授業の課題が五つほどたまっていきますが気にしません。とりあえず寝ようと思えます。

今年は新型コロナウイルスの影響で学園祭はオンライン開催となったそうです。もし順調にいけばコレがPDFファイルとしてネットの海に流れることでしょう。

学園祭がオンライン開催となったことが我々サークル関係者に伝えられたのが九月半ば。メンバーの皆には三週間何か書いてこいと指示を出し、作文が出そろったのが十月の初めでした。今回は五作品が出そろったわけですが、中でも今年入会したばかりの一年生二名が率先して提出してくれたことには、感謝に堪えません。では、そろそろ寝ます。おやすみなさい。

(山川栄)

(仮称)淑徳大学戦史研究会会報 第2号

2020年11月14日 初版発行

編集・発行 淑徳大学戦史研究会

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製及び転載することは禁止されていません。